

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between filaggrin gene mutations and the clinical features of molluscum contagiosum: the Yamanashi Adjunct Study of the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

フィラグリン遺伝子変異と伝染性軟属腫の関連: エコチル山梨追加調査

ユニットセンター(UC)等名: 甲信ユニットセンター(山梨)

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: The Journal of Dermatology

年: 2024 DOI: 10.1111/1346-8138.17157

筆頭著者名: 小島 令嗣

所属 UC 名: 甲信ユニットセンター

目的:

伝染性軟属腫のリスク要因は水泳、アトピー性皮膚炎、フィラグリン遺伝子変異と考えられている。しかし伝染性軟属腫とフィラグリン遺伝子変異との関連は、その研究が乏しいため、臨床的な特徴を含めた伝染性軟属腫とフィラグリン遺伝子変異の関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル山梨追加調査(8歳時)に参加した2036名の子どものデータを解析した。伝染性軟属腫とフィラグリン遺伝子変異の関連を多変量ロジスティック解析で解析した。

結果:

フィラグリン遺伝子変異は8.3%であり、8歳時の伝染性軟属腫の累積発生率は47.1%であった。フィラグリン遺伝子変異は伝染性軟属腫の有意なリスクであった。フィラグリン遺伝子変異は、伝染性軟属腫の初診時の数や罹患期間とは有意な違いがなかった。

考察(研究の限界を含める):

今回の研究の強みは、初めて臨床的な特徴を含めた伝染性軟属腫とフィラグリン遺伝子変異の関連を明らかにしたことである。一方、伝染性軟属腫の罹患や罹患期間が養育者の報告であることなどが、本研究の限界である。

結論:

フィラグリン遺伝子変異は伝染性軟属腫の有意なリスクであった。フィラグリン遺伝子変異は、伝染性軟属腫の初診時の数や治癒までの期間とは有意な違いがなかった。